

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02753

研究課題名(和文) 移動表現に関わる中間言語研究と言語教育への応用：英語・日本語を対象に

研究課題名(英文) Interlanguage analysis of motion event descriptions in English and Japanese

研究代表者

眞野 美穂 (Mano, Miho)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：10419484

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語と英語を主な対象とし、基本的表現であるにも関わらず、非常に誤用も多く習得困難な移動表現(e.g. John ran up the stairs.)を取り上げた。産出実験を通して、母語と学習言語を双方向に比較(母語話者の英語・日本語、英語母語話者の日本語、日本語母語話者の英語)し、移動表現における学習者言語の特徴とそれを生み出す要因を探った。その結果から、学習者言語に共通する特徴として、表現の簡略化や、母語の影響を明らかにした。また、様々な経路表現を比較することで、各言語学習者にとっての習得困難である移動事象表現を明らかにし、今後の日本語教育・英語教育で注意すべき点を示した。

研究成果の概要(英文)：This experimental study on motion event descriptions aimed to empirically show the sources of interlanguage characteristics based on production data from L1/L2 English and Japanese. Although motion event descriptions are basic expressions (e.g. John ran up the stairs./ Zyon-wa hasit-te heya-ni haitte-ki-ta.[John-TOP run-CONJ room-to enter.CONJ-come-PST] “John ran into the room.”), the learners have difficulty learning them. We analyzed production data from Japanese-speaking learners of English (E-L2(j)) and English-speaking learners of Japanese (J-L2(e)), as well as English and Japanese L1 speakers (E-L1, J-L1) bidirectionally and showed interlanguage characteristics including L1 transfer, simplification, and entrenched patterns and their causes. We also demonstrated what kinds of paths are difficult for L2 English and Japanese learners and suggested what language teachers should focus on when teaching motion expressions.

研究分野：言語学、英語学

キーワード：日英語 移動表現 経路 第二言語習得

1. 研究開始当初の背景

(1) 移動表現の第二言語習得上の重要性

グローバル化に対する社会的要請の中で、理論だけではなく実践的な第二言語習得研究に対する社会的期待は非常に大きい。しかし、第二言語習得研究は、基本的な語彙に関してもあまり進んでいない現状があった。

移動表現は、身近な行動を表し、日常的に使われる基本的な言語表現であり、すでに英語教育でも小学校外国語活動から中高の英語教育に至るまで、また日本語教育においても初級の段階で学習する基本的な言語表現の一つである。しかし、主に扱われる移動表現は基本的な構造のものだけに限られており、様々な移動表現を取り上げて詳細に学習することは、英語教育、日本語教育共に行われていない。その結果、学習者言語には誤用が多く見られるが (e.g. **John ran up on the stairs.* / *男の人はビルから走ってきた。) その特徴や誤用の要因は明らかにされていないという課題があった。

さらに、この移動表現 (特に英語では前置詞句の働き・日本語では複合述語類の働き) は、単純な移動を表す役割だけではなく、状態変化を伴う表現 (e.g. *She broke the egg into the bowl.* / このあたりにも家がたくさん建ってきた。) や使役移動表現 (e.g. *John took the guest upstairs to bedroom.*) など様々な表現 / 構文の基礎となっている点で、第二言語習得上、習得が不可欠なものであり、言語教育にとってもその教授は非常に重要である。

(2) 移動表現に関する研究成果と課題

また、移動表現自体については、言語学分野で Talmy (1985) が移動の類型を提案して以来、盛んに研究がなされてきた。移動事象に関わる要素の中でも経路を文の主要部である動詞で表す日本語と、経路を主要部以外の要素で表す英語は、それぞれ V 言語 (verb-framed language) と S 言語 (satellite-framed language) という異なる類型に分類される。さらに英語は前置詞句により移動の概念を広く他の事象に加える事ができること (e.g. *John sneezed the paper off the desk.*)、日本語では複合述語形式の多用 (e.g. 走っていく、駆け上がる) など、各言語の違いと特徴が明らかにされてきた。しかし、第二言語としての研究は少なく、特に日本語を母語とする学習者への研究は非常に限られている (稲垣の一連の研究 2001 他, Spring & Horie 2013, 吉成他 2013)。

国立国語研究所プロジェクト「空間移動表現の類型論と日本語: ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究 (代表: 松本曜)」の一環として、本研究代表者 (眞野) と分担者 (吉成) は研究協力者 (江口) と共に、日本語を母語とする学習者のデータ (英語・ハンガリー語) を、母語である日本語だけでなく、各対象言語 (英語・ハンガリー語) の母語話

者データとも比較することにより、学習言語への母語の影響 (ダイクシス動詞の多用) と、複雑な形式に関わる学習上の困難点 (英語学習者に *up* の前置詞の使用が困難な点、日本語学習者に「駆け上がる」など複合動詞の使用がほとんど見られない点など) をこれまで明らかにしてきた (吉成他 2016)。しかし、学習者言語の特徴と変移を明らかにするためには、より多くの移動事象場面を設定した産出実験を行う必要があることも明らかになり、本研究を着想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第二言語習得における学習者言語の特徴とその変容を明らかにすることである。英語と日本語を主な対象とし、様々な表現の基本であるにも関わらず、非常に誤用も多く習得困難な移動表現 (e.g. *John ran up the stairs.* / ジョンは走って部屋に入ってきた。) を取り上げる。産出実験を通し、母語と学習言語を双方向に比較 (母語話者の英語・日本語、英語母語話者の日本語、日本語母語話者の英語) することで、移動表現における学習者言語の特徴とそれを生み出す要因を解明する。特に本研究が目指す要因は、母語の影響、学習上の困難である。これらを解明することにより、移動表現の教授における教育面 (英語教育・日本語教育) での現状の課題、そして今後の教授方法についての提言も行うことを目的とした。

3. 研究の方法

研究の方法は、主に3つに分けられる。

- (1) 学習者の作文コーパスを利用した移動表現分析: 学習者の作文コーパスを利用し、移動表現にどのような特徴がみられるかを明らかにする。
- (2) 映像を利用した言語表出実験: (1) で得られた結果、及びこれまでの研究成果 (吉成他 2013, 他) から、学習者の移動表現の特徴とそれに関わる要因について仮説を立て、映像を用いた産出実験をデザインし、実施、分析する。
- (3) 総合的分析: (1), (2) から総合的に移動表現の習得に関わる要因を明らかにし、言語教育への応用を検討する。

まず(1)では、「日本人学習者自由英作文コーパス (JEFL)」を対象に、学習者の作文に生じる移動動詞の使用頻度、前置詞・不変化詞との共起関係について分析し、学習者言語の特徴を探った。

(2)では、学習者作文コーパス分析から得られた結果に加え、先行研究での課題を踏まえ、調査すべき対象を選別し、実験デザインを検討した。その結果、先行研究での経路表現の種類の問題と、英語学習者における各経路表現と共起する動詞の片寄りが明らかになったこと、そして経路による習得の度合いの際が示唆されたため、実験映像には様々な

経路を含めることにし、実験映像作成を行い、完成させた。作成した実験は、主体移動表現の44映像(様々な経路・2種類の様態)から成るものである。

完成した映像を用いた産出実験を、15名の日本語母語話者(J-L1)、15名の英語母語話者(E-L1)、12名の日本語を母語とする英語学習者(E-L2(j))、10名の英語を母語とする日本語学習者(J-L2(e))の4グループに対して行った。学習者はすべて中級レベルである。その結果を比較し、各グループの特徴と、移動表現の第二言語習得上の特徴を探った。

4. 研究成果

(1) 学習者作文コーパス調査の結果

日本人英語学習者自由英作文コーパス(JEFL)での移動表現調査の成果は以下の二点である。

ダイクシス動詞の多用

様態動詞(walk, run, swim, jump, dance)、経路動詞(enter, exit)、ダイクシス動詞(go, come)の頻度を調査したところ、ダイクシス同士の使用頻度が圧倒的に高く、様態動詞の頻度を大幅に上回っていることが分かった。

偏った前置詞・不変化詞の使用

先にあげた動詞を含む移動表現で使用された前置詞を調査したところ、圧倒的な to の使用頻度が分かった(全体の80%以上)。また、動詞ごとに特定の前置詞との組み合わせを頻繁に使用していることも分かった。これは学習者が、それらの組み合わせをセットで覚え、使用していることを示唆している。

(2) 産出実験の結果

実験データの分析から分かった学習者の言語化傾向は、次の四点である。

学習者は母語話者に比べ、移動事象に含まれる各意味概念の表出頻度が低い。

単純経路を含む30場面の分析の結果、表1、2が示すように、母語話者(E-L1, J-L1)のデータにおける様態・経路の表出頻度に比べ、学習者(E-L2(j), J-L2(e))では各移動事象概念への言及が少ないことが分かった。また、先行研究での結果と同様、日本語母語話者はダイクシスの表出頻度が高いことが分かった。

表1. 1場面あたりの各移動事象概念の平均表出頻度(英語)

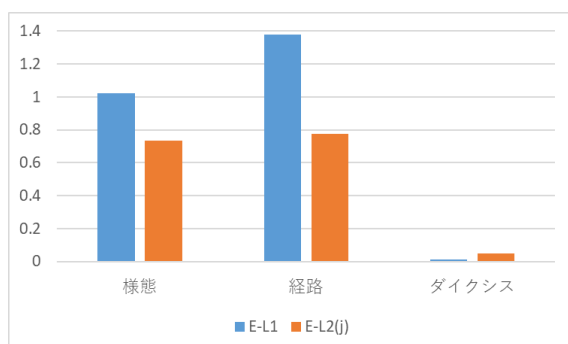
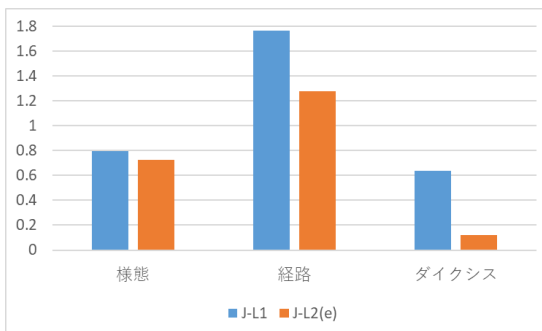


表2. 1場面あたりの各移動事象概念の平均表出頻度(日本語)



経路別の表現形式と学習者の習得度

様々な経路を含む移動事象を日英語母語話者がどのように表現するかを明らかにした。E-L1はほぼどの場面でも経路を主要部以外の要素(主に前置詞句)で表す(S言語パターン)。J-L1は、動詞で表すことが多いが(V言語パターン)経路によってはそれが複雑形式(複合動詞・複雑述語)さらに後置詞句との組み合わせによるものであることを示した。また、学習者にとっては、経路によって習得の度合いが異なっていることが分かった。E-L2(j)では、to, fromなどは使用頻度が高い一方で、past, up/down, outなどの経路場面では誤用が多く見られ、習得の困難さが観察された。J-L2(e)では、述語における複雑形式(複雑述語・複合動詞)の使用頻度が母語話者より低く、助詞の選択に誤用が多く見られた。特に along, over, pastの経路場面では誤用が多く見られ、習得上の困難さが明らかとなった。

複雑経路表出時の優先経路

三つの経路(起点・中間経路・着点)を含む4つの映像を分析した結果(例: *The dog ran from the goal under the bench into the cage.*)学習者においては、複数の経路から成る複雑経路を含む移動事象では経路の省略が起こりやすく、その場合着点が優先して表現されることが分かった。さらに、日本語母語英語学習者(E-L2(j))では、時間的な並びに反して、着点が最初に置かれることが多いという傾向が見られた(例: *The dog went to the cage from the goal.*)。これは、動詞と特定の経路をセットで習得している可能性(4.1節参照)を支持する結果である。

ダイクシスの表出頻度や動詞で表す意味概念などにおいて母語の影響が観察された。

S言語(英語)を母語とする日本語学習者と、V言語(日本語)を母語とする英語学習者の言語表現を比較することで、母語の影響が、ダイクシスの表出頻度(E-L2(j)でのダイクシスへの言及)と、主動詞で表す意味概念(特にJ-L2(e)では様態動詞の使用の多さ)という点で、観察された。

(3) まとめ

本研究の結果、言語表現として重要な役割を果たす移動表現をめぐる学習者言語の特徴について上記の点を明らかにすることができたが、これら学習者言語の特徴には、教材を含む言語教育の影響（眞野 2016, 眞野・鈴江 2018）と、簡略化を含む学習者の方略が要因として存在していることは明らかである。今後のこれらの結果を教材の改善に応用することが望まれると共に、どのようにすれば、これらの特徴を母語話者の言語表現に近づくのか、異なるレベルの学習者を対象とした習得過程の解明が必要とされることを付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 6 件)

眞野美穂、鈴江涼子 (2018) 「中学校英語検定教科書における動詞の出現頻度調査：現状と課題」、『鳴門教育大学研究紀要』〔査読なし〕33 巻、pp.295-308.

吉成祐子、江口清子、眞野美穂 (2017) 「イタリア語およびハンガリー語を母語とする日本語学習者の移動表現類型論から見た母語の影響」、『ヨーロッパ日本語教育 報告・発表論文集』〔査読あり〕、pp.249-254.

吉成祐子 (2017) 「言語使用の観点から見た移動表現の類型論：日本語・英語・イタリア語話者の主体 / 客体移動表現」、『西原哲雄・田中真一・早瀬尚子・小野隆啓 (編) 『現代言語理論の最前線』〔査読なし〕、pp.216-230.

Yuko Yoshinari (2016) “Influence of L1 English on the descriptions of motion events in L2 Japanese with focus on deictic expressions.” Kaori Kabata, Kiyoko Toratani (eds.), *Cognitive-functional approaches to the study of Japanese as a second language*〔査読あり〕、pp.275-300.

眞野美穂 (2016) 「日本人英語学習者の移動表現についての予備的研究」、『鳴門英語研究』〔査読あり〕、26 巻、pp.223-236.

Yuko Yoshinari (2015) “Describing motion events in Japanese L2 acquisition: How to express deictic information,” Iraide Ibarretxe-Antunano & Alberto Hijazo Gascon (eds.), *New horizons in the study of motion: Bringing together applied and theoretical perspectives*〔査読あり〕、pp.32-63.

〔学会発表〕(計 12 件)

Miho Mano, Yuko Yoshinari, Kiyoko

Eguchi (2017) “A bidirectional study on motion descriptions of English and Japanese L1 and L2 speakers: Focusing on the influence of deictic expressions in L1 and the learner language properties,” British Association for Applied Linguistics (BAAL).

Yuko Yoshinari, Fabianna Andreani, Miho Mano (2017) “Reconsideration of path salience in motion events: Coding patterns of multiple paths in Italian, Japanese, and English,” International Cognitive Linguistics Conference (ICLC) 14.

Miho Mano, Yuko Yoshinari (2017) “Paths to second language acquisition: Motion event descriptions in L1 and L2 English and Japanese,” ICLC 14.

Yo Matsumoto, Kimi Akita, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Hiroaki Koga, Miho Mano, Ikuko Matsuse, Takahiro Morita, Kiyoko Takahashi, Ryosuke Takahashi, Yuko Yoshinari (2017) “Linguistic representations of the path of vision: A cross linguistic experimental study,” Neglected Aspects of Motion Event Descriptions.

吉成祐子、眞野美穂、江口清子 (2016) 「日本語学習者の使役移動表現：INTO 経路を表す際の中間言語的特徴」、『第 27 回第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会』Yuko Yoshinari, Fabianna Andreani, Miho Mano (2016) “Reconsidering the typology of motion expressions: Focusing on differences between Italian, English, and Japanese.” The 49th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europe (SLE).

吉成祐子、江口清子、眞野美穂 (2016) 「イタリア語およびハンガリー語を母語とする日本語学習者の移動表現類型論から見た母語の影響」、『The 20th Japanese Language Education Symposium in Europe (AJE)』.

Yuko Yoshinari, Miho Mano, Kiyoko Eguchi (2015) “Interlingual versus intralingual tendencies in second language acquisition: Expressing motion events in English, Hungarian, and Japanese,” The 15th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition (PALA).

Yuko Yoshinari (2015) “The choice of the construction for motion events in Italian: A comparison of Japanese and English expressions,” ICLC 13.

Matsumoto Yo, Kimi Akita, Kiyoko Eguchi, Monica Kahumbu, Miho Mano, Takahiro Morita, Kiyoko Takahashi (2015) "Clause integration in different types of caused motion: A crosslinguistic experimental study." ICLC 13.

松本曜・夏海燕 (2015)「直示動詞における「話者領域」と視覚性：日中英語におけるビデオ実験による考察」日本言語学会第151回大会。

Yuko Yoshinari, Fabiana Andreani (2015) "Italian expressions of motion events: Observation from the encoding pattern of deictic information in comparison with English and French." Going Romance 29.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

眞野 美穂 (MANO, Miho)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：10419484

(2) 研究分担者

吉成 祐子 (YOSHINARI, Yuko)
岐阜大学・留学生センター・准教授
研究者番号：00503898

松本 曜 (MATSUMOTO, Yo)
国立国語研究所・理論・対照研究領域・教

授
研究者番号：40245303

(3) 連携研究者
()

研究者番号：

(4) 研究協力者
江口 清子 (EGUCHI, Kiyoko)
宮崎大学・学内共同利用施設等・講師
研究者番号：90812537